ハイチ大地震

他人のためなら頑張れる

国際協力NGO「JEN」理事・事務局長
木山 啓子さんに聞く

ハイチへの出動

ハイチで大地震発生の一報が届いてからしばらく情報が途絶えました。通信網が破壊されるほどの甚大な被害が予測されたので「これはまずいな」と思いました。同時に米国の懐にある国なので、私たちが出動すべきか少し迷いました。緊急事態発生当初は盛んに報道され注目もされますが、すぐに関心が薄れて支援のためのお金も集まらなくなる。災害は一瞬でも復興には長い時間がかかります。そして、刻一刻と変化する現場のニーズに沿って多様な活動を継続しなければなりません。中途半端で撤退する位ならやらない方が良い場合もある。でも情報が集まり、被害の全容が明らかになるに従って、やはり出動しなければいけないな、と覚悟を決めました。

出動するかどうかは、出来る限り情報を集めた上で判断します。現地時間の（本年1月）12日夜に地震が発生し、13日の朝には出動を決定しました。北海道より少し小さいイスパニョーラ島の西側約3分の1がハイチでフランス語圏、東側のドミニカ共和国はスペイン語圏です。イラク支援の遠隔管理拠点であるアンマンに出張中だったフランス出身のJEN海外事業部長に連絡を取って、パリ経由で急遽現地に向かってもらいました。そのほか、フランス語ができるスタッフ3人を別々のルートで送り出し、ドミニカ共和国の首都サントドミンゴ経由でポルトープランスに入ったのが19日です。日本の団体としては非常に早い方ですが、それでも発生から1週間も経っています。欧米の団体は70人とか100人とかの規模で、もう初日から救命活動を始めています。もともとそういう地力の差のある中、誤解される言い方かも知れませんが、現場では競争しながら活動しています。

米軍による現地の治安維持活動も報じられていますが、NGOの治安管理は独特です。私たちNGOは、自分達の身を守るためにできる限り武器は所持しないようにしています。武器を持っていると、強盗たちはまず私たちの命を奪ってから略奪しようとします。でも丸腰であると判っていれば、脅して追い払ってから略奪すればいい。ですから銃を持った人たちと一緒に活動することは、自分たちのリスクを高めることになります。身を守る絶対的な方法はありませんが、極力地元に溶け込むなど、みな様々に知恵を絞って活動しています。

貧困がもたらす悪循環

津波は家々を丸ごと流してしまうので、スリランカの被災地は、破壊しつくされた状態でした。しかしお金持ちの家は無事で残っているものもある。貧しい人は建物の質が悪いから被害も大きく復興に時間がかかる。復興に時間をかけている間に他の地域では生産活動を再開するから、格差がどんどん広がる。生活が再建されなければ教育どころではない。すると貧困がもっとひどくなり、建物の質が更に悪く…という悪循環が起こります。

近年の治安の悪化も悪循環の一要素です。例えばアフガニスタンのような所では治安の許す地域で活動せざるをえない。すると治安が悪くて支援を受けられない周辺地域との格差が広がってしまう。格差の存在自体が不安定化要素になるので、隣接している地域の治安も悪化してしまう。また、治安が悪いと治安対策コストがかさんで、限られた資金の中で支援に使えるお金がさらに少なくなる。

より大きな課題は支援の質です。本来人々が持っている力が生かされ、依存を高めないような支援が質の高い支援であると私たちは考えています。依存を高めてしまうと一層貧困から抜け出せなくなり、更なる支援が必要になる。平時でも緊急時でも自分達の問題を自分たちで解決できず、いつも支援を仰がなくてはならなくなる。緊急時にはとにかく命を救え、生活を救えと目先のことだけで行動しがちですが、一歩引いて命を救いながらも依存を高めない、自立を支えるような支援をすることが非常に大切です。

ハイチの被災地　補修したシェルターの前で

ですから私たちの全ての活動は自立のための手段です。民生支援のポンプ式井戸建設も、壊れることを前提として活動を行う。つまり作業の中で部品を調達・管理し、壊れた部品を分解し取替えて元通りにするという当たり前のことを現地の人たちだけでできるような仕組みを作るように導く。直せることが次第にわかると、壊れていた周辺の井戸も自分達の手で直したと嬉しそうに報告してくる。人の役に立つことが嬉しくなり他の井戸も直しに行き、その姿を見て発奮して自分達も井戸を直せるようになりたいと言う人たちが出てきたりする。

人道支援という名の下に自衛隊を外国に派遣することに対して意見を求められることがあります。外交としての意味などを度外視して、純粋に支援だけの観点からいえば、依存を高めないための配慮も極めて弱く、質が悪すぎると思っています。それよりは、質の高い支援を提供出来る組織に任せて、被災者の自立を達成するという根本的な解決を図ってもらいたいものです。

傍観は自分のリスク

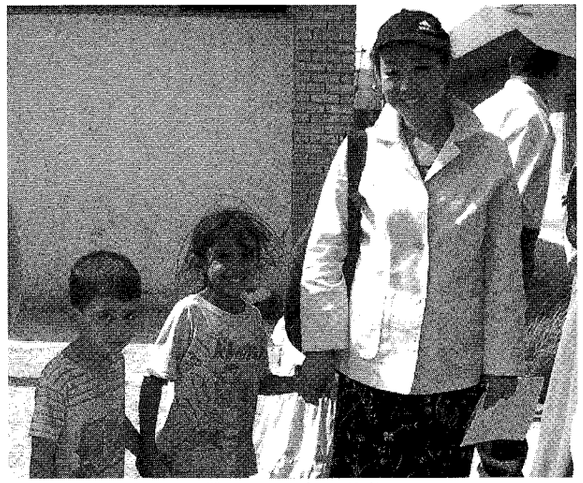
そもそも支援をするのは、人道的に放置できないからですが、紛争や貧困などを放置すること自体が、私たちにとって大きなリスクでもあります。格差が不安定の元となり、治安が悪化すれば、国境を接した隣国にも不安定な地域が広がって、まるで紛争が輸出されたような状況になっていきます。今のアフガニスタンが例となるかもしれません。

旧ユーゴ紛争でも、住民はみな戦争の開始を予期していたのかと思っていましたが「そんなこと全然思っていなかった。最初はスロベニア、続いてクロアチアが独立したので、ボスニアも戦争に巻き込まれるだろうか、でもまさか自分たちの国が戦争に突入するわけがないよね」と話し合っていたそうです。まさかと思いながらも戦争を回避するために自分たちが出来ることを考えて、戦争反対のデモをしたそうです。当時人口50万人のサラエボで、なんと30万人のデモをやった。ものすごい盛り上がりで、これでみんな戦争を回避できたと確信したそうです。大統領選挙でも戦争反対派の候補が当選して「良かった、これでもう戦争は起きないね」と言って1週間目に戦争が始まったと聞きました。それでも、デモも成功したし大統領も戦争反対派だし、戦争はそんなには続かないだろう、夕方には戦争が終わりましたというニュースがあるだろう、くらいの気持ちでいたそうです。しかし1日経っても終わらない。じゃあ明日かな、まあ来週には終わるよね、と相変わらず軽く考えていた。ところが次第に砲撃の音を耳にし、知り合いや親戚が怪我をしたとか死んだ、という話を聞くようになる。とうとう自分達も戦争に巻き込まれたのではないか、と本当に思うようになったのは戦争開始から1カ月位たった時だったといいます。それから戦争は4年間続いた。この話を聞いて、この日本でもいつ何が間違って戦争にならないとも限らない、と思うようになりました。ですから分岐点では必ず行動することが大事で、次の

時にやればいいでは許されない、と今は強く思います。

極限状態の人に教えられること

紛争や災害など緊急事態から支援に入ることが多いので、愛する人や大切な財産を失って悲しむ人にいつも出会います。全てを失いあまりに落ち込んだ人は頑張ろうという気持ちには中々なれません。第二次大戦のときに夫と次男を、今回の旧ユーゴ紛争で長男と三男をなくして、天涯孤独になったというおばあさんに出会ったことがあります。それでも励ましたいと思って、いまの望みを質問したら「一日でも早く死ぬことです」と言われました。そんな方のために私たちができることは何か、と考えながら活動しています。前向きに生きる力を取り戻してもらうため、私たちは心のケアを大切にしています。


難民キャンプにて筆者

絶望の淵にいる人は落ち込み過ぎていて挨拶もできないこともあります。ソーシャルワーカーが編み物を勧めながら「今日はごきげんいかがですか」などと話しかけます。暫く時間が経って編み物が進んでくると、話し始めることもあります。話してみれば、同じ様に悲しい思いをしている人がほかにもいることに気がつき、話して、思いを言葉にすることで少しずつ乗り越える心の準備が出来てきて、自分が癒されてくる。編み物は家に持って帰れないようにしています。集まってみんなと話す機会をなるべく多く持ってもらうためです。作業をし、話をすることで少しずつ落ち込みの悪循環から解放されていく。セーターが仕上がる頃には、サポートし合える仲間のグループができています。JENは自立支援なのでいずれ去っていく団体です。ですから現地にサポートグループを作ることが非常に大事だと考えています。

２００３年のイラク戦争の後、イラクに出稼ぎに行ったスリランカ出身の父親がいます。家族は父親の身を案じ、父親も望郷の念に耐えながら、家族一緒に裕福に暮らせることを夢見て1年間頑張り、危機も乗り切って帰ってきました。その1週間後の２００４年末の津波でこの父親は、自分以外の家族をみんな亡くしてしまうのです。私たちは、お酒におぼれて自暴自棄になった父親を慰めることが出来ずにいました。心のケアのプロジェクトに呼び掛けても来てくれない。そんなとき、この父親は、自分と同じように家族を全員亡くした男の子に出会います。父親は「この子は自分と同じだ」と思い、「この子のために生きよう」と思ってから元気を出し、お酒もやめ、とうとう私たちの心のケアのための魚網作りのプロジェクトのリーダーになってくれました。そんな例を私は世界中でたくさん見てきました。本当に極限的な状況のときに人は自分のためには頑張れないけれど、誰か別の人のためならば頑張れる、その人を喜ばせたいと思う利他的な精神が、私たちひとりひとりのＤＮＡの中にある、と気づかせてもらいました。

（構成・文責　本誌編集委員　野澤　信一）

きやま・けいこ　１９９４年、ＪＥＮの前身である日本初の連合ＮＧＯ「日本緊急救援ＮＧＯグループ（=Japan Emergency NGOs　本部事務局・東京都新宿区）」の立ち上げに参加。２０００年まで6年間旧ユーゴスラビアに駐在。モンゴル雪害やインド西部大地震、フセイン政権崩壊後のイラクなどでも活動。日経ウーマン誌「ウーマン・オブ・ザ・イヤー２００６」総合第1位。

●６０年安保闘争５０周年、ベトナム解放３５周年記念

池澤夏樹・吉川勇一講演会

池澤夏樹「『カデナ』を記して――４０年あとのべ平連」
吉川勇一「鶴見俊輔さんの『小田実の組織論』について」
DVD　ロングインタビュー「鶴見俊輔　戦後日本人民の記憶」（一部上映）

▶日時：**６月１６日（水）**　午後６時３０分～９時　（開場６時）
▶会場：東京・渋谷　千駄ヶ谷区民会館
（ＪＲ原宿駅、東京メトロ明治神宮前駅　徒歩７分）
▶参加費：８００円（資料代として）
▶主催：市民の意見３０の会・東京　　▶協賛：市民意見広告運動
（同封チラシ参照）

■60年安保闘争から半世紀、ベトナム戦争終結35周年にあたる今年、沖縄普天間基地撤去を要求する人びとの声が再び大きなうねりを作りだそうとしています。この記念すべき年にあたって、最近ベトナム戦争時における沖縄の人びとの反戦活動を描いた小説『カデナ』を発表された作家池澤夏樹さんに、この作品を書いた理由と、沖縄の現状への思いを話していただきます。

■また「鶴見俊輔さんの『小田実の組織論』について」と題して、哲学者の鶴見さんのＤＶＤ記録映像の一部を上映するとともに、吉川勇一さんに講演をお願いします。当初は、故小田実さんをめぐる連続講演の締めくくりとして、鶴見さんに話していただく予定でしたが、講師のご都合により変更致しました。ご了承ください。

「米軍基地を抱え込んでいる沖縄があり、あの戦争で捨て石にされた沖縄がある。沖縄は被害者の島です。当然、それを組み込まなければ沖縄を書いたことにならない。そんなに意識していなかったが沖縄が書かせたんですね」

「僕はどうしようもなく反戦的反軍的なんですね。いかに彼ら、戦争に加担する勢力の鼻を明かしてやるかを考えている。最近、僕は『べ平連』だと言っています。40年遅れてきた『べ平連』……」

「戦争の歴史を背景にしているとはいえ、真ん中にどんと据えてしまうと、怨念と糾弾の小説になってしまう。実際には軽くはないが、もう少し軽いものの中に埋め込んでおきたかった。大きくて強い組織に、小さくて弱いものがどう立ち向かえるか。徒手空拳ながらやれることがある。それも歯を食いしばらずに」……

（『朝日新聞』２００９年11月10日号より）